

社のムックに高柳さんに書いていただいたエッセイ「若き日に」が収録されています。病気で寝ている重信さんの枕元で酒を飲んだ話だったと思う。よく会っていたのはいつごろだったかなあ。『直立せよ一行の詩』よりも、もうちょっと前だったと思うんだが。(第7回「カリスマ高柳重信との交友が始まる」を参照)

高山 一九七三年、「季刊俳句」二号で高柳重信、清水昶と座談会をされていますから、ずっと付き合いは続いていたようですね。『佐佐木幸綱の世界』にも高柳さんのことは書いていらっしやいますので、一度、しっかりとお話ししていただいたほうがいいのではないかとずっと思っていました。

幸綱 高柳重信さんは一九二三年(大正十二)生まれ、早稲田大学の先輩です。俳人で、富澤赤黄男(1902-62)の弟子というのかな、赤黄男の系統の俳人です。新興俳句系の俳人とも呼ばれますし、金子兜太さんと共に当時、前衛俳句をしようしていた俳人でした。特徴は多行形式、それも四行で表記する。俳句は五・七・五だからいわば三行詩なんだけども、四行で書くところが独特だった。間に空白の行がある。つまり「切

れ」を空間で表しているわけ。例えば、

船焼き捨てし
船長は

泳ぐかな

は、三行目が空白になっていて、そこに「切れ」というか「間」がある。多様な表現的な実験もされていて、十七文字が全部、横に一字ずつ並んでいるとか、活字の大きさが違うのとか、そんな実験をいろいろやった俳人です。博識な人で、江戸俳句にも近代俳句にとっても詳しくかった。また、フランス文学のサンボリズム(象徴主義)の影響も強く受けていた人でした。

高柳さんは戦後、大阪の塚本邦雄さんと文通で盟友関係を結んでおられて、東京と大阪で、俳句の革新と短歌の革新をやろうと約束して、同時に句集と歌集を出す計画もあつたと聞いたおぼえもあります。うまくいかなかったわけですね。高柳重信の第一句集『露子』が昭和二十五年、塚本邦雄の第一歌集『水葬物語』が昭和二十六年の刊行です。

重信さんとの出会いは、早稲田短歌会、早稲田俳句会両方に入っていた牛島伸君が

「早稲田俳句会の大先輩で素晴らしい俳人がいる。話が面白い人だから。ぜひ、行こう」と誘ってくれて、代々木上原の重信さんの家に連れて行ってくれた。それが最初でした。当時は「俳句評論」という雑誌をやっておられた。のちに「俳句研究」の編集長もなさったけどね。話を始めると、お酒を飲みながらですが、「文学とは」「伝統は」とか、そういう大問題もいろいろしゃべってくれた。「読者論」とか俳句、短歌の「読み」の問題とか、重信さんにぜひぶん教えられたんだと思います。こちらも、いつも酔っ払っていたけどね。お宅に一年半くらい通ったかなあ。月に一、二回くらい。二人でウイスキーを一本半くらい、一晩で飲むというかたちでした。

高山 『佐佐木幸綱の世界』では、高柳さんは咯血してから飲めなくなったそうですが。幸綱 朝からウイスキーを飲んだらしくて、アル中になって、咯血をしたりするんだけど、僕がよく行ったのはもっと前の話だね。カリスマなんだよね。文学青年がみんな巻き込まれちゃうカリスマだった。聞いた話だと、そのカリスマ性に染まった最初が加藤郁乎で、二番目が大岡信、三番目が寺